非鉄金属

銅・黄銅棒やマグネシウム板材を手掛ける権田金属工業（本社・相模原市中央区）は創業100周年を迎えた。災害や戦災を乗り越えつつ時代に合った高品位素材を供給し続けており、今後も事業の幅を広げながら社会の要請に応える。同社の歴史や今、今後の成長戦略について権田源太郎社長に聞いた。（古瀬 唯）

権田金属工業 創業100周年

権田 源太郎社長に聞く

——100周年を迎えた所感から。

「祖父の権田藤三郎が社会貢献の意思に燃え1918年に地金商から黄銅棒メーカーに商いを変えたのがスタート。横浜の地で手探りでモノづくりを始め、先々代・先代が震災や戦災など、さまざまな苦難を乗り越えて今がある。一世紀にわたって支えていただいた顧客の皆さんや、従業員に深く感謝をしたい」

——ターニングポイントとなった出来事は。

「戦前・戦中に三度、存亡の危機に立たされたが決して諦めなかったこと。事業が軌道に乗り始めた1922年には台風で工場の屋根が吹き飛ばされ、翌年には関東大震災で壊滅状態になった。債権者に協力を得て再建し、高品位な製品が認められ海軍の指定工場にもなったが、45年には空襲で被災。終戦時には工場と大口顧客を失っていた。撤退も考えたが、当社の製品が欲しいという声が市場から上がり再起を果たした」

「良品共栄」の理念で発展

新事業・用途開拓に注力

——戦後も順調に成長を続けてきました。

「戦後は2代目社長である父の忠志が朝鮮戦争後の不景気の際に、苦境の中でも新たな商機を求め反射炉を導入したことが大きな転機。その際に手掛け始めた銅棒やブスバーは現在の事業の礎だ。また工場があった横浜駅近辺の商業開発で、60年代に現在の相模原市に移転したこともターニングポイントになった。広い土地の確保で経済成長に合わせた生産拡大ができたほか、工場跡地に設けた商業施設は経営をも下支えする安定的な収益源になった。私は務めていた商社から83年に社長として家業に転じ、成熟市場の中でも成長軌道を描くため加工品事業の強化や新規事業の創出に取り組んできた」

——新規事業ではマグネシウムの板材に取り組んでいます。

「マグネシウムは資源が豊富で実用金属としての最軽量なため需要増が見込まれる。また現有の設備・技術の活用が可能なことも利点だった。2002年から研究開発を始めるなど、ロールの間に溶湯を通し、板を形成する双ロール鋳造法に関する特許を取った。当社の製法は生産性が高く、強度と耐食性に優れるAZ61などさまざまな合金の薄板を製造できる。07年には量産工場を竣工し、12年ごろには減圧環境下で厚板を製造する反重力鋳造法の技術も確立した。現在は建材や電池材料、熱処理に使うリフローパレットなどを手掛けている。また新構造材料技術研究組合の鉄道向けの開発プロジェクトにも参画している」

——現在の特長や競争力は。

「銅や黄銅の丸棒では培ってきた技術が生きる直度、表面品質に優れる太物が得意。真円度や真当社の太物丸棒は、顧客が部品に加工する際の生産性を高めている。また需要が増えつつある無酸素銅製品を高効率に製造できることも強みだ。加えて充実した検査設備による品質力や、人員体制を厚くして高めた研究開発力も特長。さらにマグネシウムについても多彩な技術を有している」

——今後力を入れる施策は。

「今後の内需は横ばいか微増で、リーマンショック前の水準まで戻すのは難しいだろう。その中で成長するには現有の市場・製品でシェアを維持しつつ、新たな挑戦をすることが重要。今後は銅・マグネシウムともに個々の引き合いを大切にしながら、さらなる用途開拓を進める。また複雑な形状を成形する型打ち鍛造品で大型のものを増やし、エネルギー関連の成長需要などを捕捉したい。併せて高付加価値化・顧客とのタイアップを進めながらさらに川下の加工も模索するほか、横浜の工場跡地のビルを建て替えて耐震性や資産価値を高める」

——最後に、目指すべき企業像と実現に向けた方策について。

「先代は良い品を世に出し、顧客・仕入先・地域とともに繁栄する『良品共栄』の理念を掲げた。伸銅業で良品を製造するには機械操作のノウハウが重要。四者が今後より発展するため、品質を高める人づくりに力を入れ続ける。また品質方針であるSST（サービス・スピード・テクノロジー）に沿って、顧客満足度の向上や明日を築く研究開発にもさらに注力する」

19年 世界の亜鉛・鉛地金需給

亜鉛、7万2000トンの供給不足

鉛は3年ぶり供給過剰

国際鉛・亜鉛研究会（ILZSG）がまとめた18～19年の鉛・亜鉛需給予測によると、鉛地金は18年が12万3千トンの供給不足、19年が5千トンの供給過剰と予測。亜鉛地金は18年が32万2千トンの供給不足、19年が7万2千トンの供給不足と予測した。鉛は春季予測に比べ18年の不足幅が拡大する見込みだが、19年は3年ぶりの余剰バランスに

リチウムイオン電池の普及で電動バイクを含む輸送分野における減少傾向が続くとみた。一方、欧州は18年が同

Fujikura
株式会社フジクラ
www.fujikura.co.jp

42万トン（同比1・4%増）、消費量1374万トン（同比0・4%増）、19年が供給量1381万トン（同比3%増）、需要1388万トン（同比1・1%増）と予測。19年が比4・1%増、19年が同比2・7%増と増加する見通しにあるほか、豪州、カナダも増加と予測した。米国は18年が減少する見込みだが、19年は回復すると予測。日本も18年は前年並みにとどまるが、19年は同比5・5%増と高い伸びを見込む。

最大消費国の中国の見掛け消費は、環境規制の影響などで18年は同比0・5%減、19年は同比0・8%増にとどまると予測。一方米国は18年が同比2・1%増、19年が同比0・9%増、欧州が18年は

の展開となり、この1週間での上げ幅をすべて打ち消した。

また、銅は前日比13・5ドル安の現物6169ドル。中国が預金準備率引き下げに踏み切ったことで景気下振れの圧力が高まっていると悲観的な見方を背景に、上値重く推移した。

銅建値の推移

（単位：千円／トン）

月	日	価格	平均
7.	1	780	
	5	750	
	12	730	740.4
	20	720	
	25	730	
8.	1	750	
	3	730	
	8	720	
	15	710	716.0
	20	690	
	23	700	
	28	720	
9.	3	710	
	6	700	
	13	710	717.7
	19	720	
	25	750	
10.	1	750	
	4	770	751.9
	9	750	

JX金属 銅建値2万円下げ

JX金属は9日、電気銅建値を2万円引き上げ75万円にすると発表した。5日ぶりの改定で、9日時点の10月平均価格は75万1900円。

ン1万5千円下落し

系ともに仕切値をトン1万5千円値下げした。

かねてより市中では、今回の改定前まで急伸した銅価に対し、先行き警戒感があった。しかし、LME在庫は直近の30万トンピークに、漸減傾向が続く。世界的に銅への需要が増加しているとみられる。

金続落 16・415ドル安 ロンドン

【ロンドン＝時事】週明け8日のロンドン自由金市場は外国為替

GSユアサ

世界最大規模の蓄電池設備受注

北海道地区 風力発電の出力変動緩和に貢献

GSユアサ（本社・京都市南区、社長・村尾修氏）は9日、北海道豊富町に設置する世界最大規模の蓄電池設備を受注したと発表した。蓄電池設備は、風力発電の出力変動緩和に貢献する。

北海道北部風力送電

が計画する「のための送電実証事業」でシステム建設計・調達・建C）業務を担化工建設から蓄電池設備設受注したもの。

北海道北部・北豊富変電道天塩郡豊富22年度稼定）は、世界の出力24万キロワット（720メガワット）・容の蓄電池設備る。工事は20開始する予定

金反落 17

【ニューヨーク＝時事】週明け8ニューヨーク商（COMEX）先物相場は、でのドル高先に売られ、反中心限月12日値は前週末比

ドルで寄り付き1194・80めされた。

・565ドルと、前営業日終値比16・415ドル安で引けた。

ドルは対円では軟化したものの、ユーロやポンドなど他の主要通貨に対しては強含んだ。

金塊相場は前週に1200ドルを挟んだ売買が続いていた。CMCマーケッツのデービッド・マッデン氏は「ついに金塊相場に動きが出た。もし下落局面に入るのなら、1160